

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：32692

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24593534

研究課題名(和文)子どもとの継続的世代間交流はアルツハイマー病者の生活の質を維持改善するか

研究課題名(英文) Can continuous intergenerational cooperation positively impact the quality of life of elderly Alzheimer's sufferers?

研究代表者

六角 僚子 (Rokkaku, Ryoko)

東京工科大学・医療保健学部・教授

研究者番号：10382813

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：継続的世代間交流がアルツハイマー病者のQOLを維持改善することを明らかにすることを目的とし、介入2年後の介入群6名、対照群5名ともにアルツハイマー病者で、通所介護施設へ通っている対象者を調査した。結果、QOL-AD尺度において、QOL-AD(本人)はグループ間で有意差がみられた。さらに気分状態評価のPleasure(楽しみ)、Interest(関心)、の2項目においてグループ間で有意差が認められた。一方QOL-AD(家族)の結果からは、家庭における状況への影響は示されなかった。世代間交流は、中等度から重度のアルツハイマー病者本人のQOLを向上させることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：An aim of the present study is to examine the impact of inter-generational cooperation on the quality of life of elderly Alzheimer's sufferers. The subject consist of an intervention and a control groups of six and five sufferers, respectively, who were diagnosed with Alzheimer's disease. Both groups attend day care services. The intervention group participates in the inter-generational program with children, while the control group does not. In the results, the score of QOL-AD of the subjects has been significantly higher in the intervention group comparing with that of the control group. Also the PGC-ARS, have been significantly higher in the intervention group those in the control group. The magnitude of the change was not so remarkable as to influence QOL-AD at home. The present intergenerational cooperation may improve the quality of life of moderate to severe Alzheimer's sufferers.

研究分野：高齢者看護学

キーワード：老年看護 世代間交流

1. 研究開始当初の背景

社会保障・人口問題研究所の人口統計資料集 2013 年版によれば、2011 年の総世帯数に対する 3 世代家族(65 歳以上の高齢者が世帯主である直系 3 世帯以上)の割合は 6.42%と低く、小中学生に代表される子どもたちが、認知症を含む高齢者の生活と接する機会がきわめて限定されている。世代間交流に関する研究は 1970 年代より取り組まれて、最近の先行研究では、2004 年に東京都老人総合研究所による高齢者の社会参加に関する介入研究「世代間交流型社会貢献プログラム」が実施され、交流活動を通して子ども・保護者とのかかわりが増え、地域に活動が拡大していったことが報告されている。また高齢ボランティアによる子どもへの読み聞かせ介入研究「REPRINT」で、高齢者の主観的健康感や社会サポートネットワークが増進されたなどの効果が報告されている。最近では「都市部多世代交流型デイプログラムにおける世代間交流を促進する支援過程」として世代間交流の形成過程を質的に明らかにしている報告もある(糸井、2008.亀井ら、2010)。また中井(2009)は世代間交流により子どもは生活習慣や他者(特に、高齢者)への共感能力が身につく、高齢者は生き甲斐と自尊心が生まれるとともに、母親の子育て支援に対しても社会的祖父母力を発揮できることを実証している。しかし日本において、アルツハイマー病は認知症の原因別疾患としては 6 ~ 7 割を占めているにもかかわらず、アルツハイマー病者に特化した世代間交流の取り組みは見当たらない。本研究では子どもを介しての社会的交流を継続的に持つことは、アルツハイマー病者の生活の質の維持・改善に寄与すると期待される。

2. 研究の目的

本研究の目的は、子どもとの継続的世代間交流はアルツハイマー病者の生活の質を維持・改善するかどうかを検討するものである。

3. 研究の方法

本研究は子どもと継続的にかかわりをもつ世代間交流の介入研究であり、対象群は A 市の通所介護施設 2 か所に通う、臨床的にアルツハイマー病と診断された者 10 名ずつとする。(1)介入期間 平成 24 年 8 月 ~ 平成 26 年 8 月、(2)介入群：保育園児との長期的かつ継続的な世代間交流プログラムに参加するアルツハイマー病者 10 名、(3)対照群：保育園児との世代間交流の機会を持たないアルツハイマー病者 10 名、(4)交流プログラム：子どもとアルツハイマー病者と畑づくり、昔の遊びなどの相互で楽しめるアクティビティケア(以下 A C)実施。月曜日から土曜日までの午前中 10 時 ~ 11 時までの 1 時間である。(5)測定方法：生活実態について本人・子ども・家族・保育士からインタビューを行う。FAST(Functional Assessment Staging)。長谷川式簡易知能評価スケール(HDS-R)。Disability Assessment for Dementia(DAD) Behave-AD(Behavioral Pathology in Alzheimer Disease)。Philadelphia Geriatric Center Affect Rating Scale。QOL-AD(Quality of Life-AD)を用い、介入前、12 か月後、24 か月後に測定を実施する。(6)分析方法：各測定時期において、インタビューや観察実施したことは記録とし、介入群と対照群の比較は二元配置分散分析を用いた。統計処理には SPSS Ver22 を使用し、有意水準は 5 %未満とした。

4. 研究成果

(1)対象者属性 介入群：臨床的にアルツハイマー病と診断された者 11 名(うち男性 3 名、女性 8 名)であり、平均年齢は 86.5 歳、認知症症状の程度は FAST で平均 4.0、長谷川式簡易スケールで平均 12.18、DAD が平均 52.7 であった。介入 2 年後は 6 名(女性のみ)と減り、理由は施設入所したためである。平

均年齢は 88.1 歳、FAST は平均 5.17、長谷川式簡易スケールで平均 11.67、DAD が平均 42.0 であった 対照群：アルツハイマー病と診断された者 12 名（うち男性 3 名、女性 9 名）で平均年齢は 84.5 歳、認知症症状の程度は FAST で平均 4.56、長谷川式簡易スケールが平均 9.37、DAD が平均 35.6 であった。介入 2 年後は 5 名（男性 1 名、女性 4 名）と減り、理由は施設入所したためである。平均年齢は 84 歳、FAST は平均 5.6、長谷川式簡易スケールで平均 7.6、DAD が平均 15.07 であった。介入群と対照群についていずれにおいても有意差は認められなかった。

(2) スケール等結果：生活の質(QOL)は QOL-AD(Quality of Life-AD) 図 1

QOL-AD 本人：介入群では介入前の平均値は 35.27、介入 2 年後は 35.4 であり、対照群では介入前で 32.08、介入 2 年後は 31.0 となっており、グループ間での時間・介入・対照群において有意差が認められた。 $F=2.983(p<0.05)$ QOL-AD 家族：介入群では介入前の平均値は 31.36、介入 2 年後は 27.5 であり、対照群では介入前で 29.92、介入 2 年後は 26.4 となっており、グループ間での有意差は認められなかった。一方 気分状態評価：Philadelphia Geriatric Center Affect Rating Scale(以下 PGC-ARS) 図 2、図 3 では介入 2 年後には楽しみ($F(1, 13) = 9.180 (p<0.01)$)、関心($F(1, 13) = 8.630 (p<0.01)$)について有意差が認められた。

まず結果としては、各群の対象者は後期高齢の中等度から重度のアルツハイマー病者だった。認知機能は介入前と比較し、2 年後はそれらが低下していることがわかる。このように重症化から施設入所や合併症悪化となり、人数もかなり減少となった。そのため少人数での分析結果となった。初期の段階のアルツハイマー病者が対象となれば、またその結果も違っていても推測される。本研究において、QOL-AD(本人)と PGC-ARS 測

定では有意差が認められた。つまり子どもたちとの継続的な交流は、中等度から重度のアルツハイマー病者の QOL を向上させることが示唆された。デイサービスへ通っている間だけではなく、生活全般の質の向上がなされたとも換言できる。今回 QOL-AD(家族)の評価で有意差がみられなかったが、さらなる長期的・継続的な交流はアルツハイマー病の生活の質を高め、それらが家族の介護負担の軽減につながると予測することができる。また PGC-ARS 評価からは、デイサービスを利用している日中、その瞬間、その時に楽しんでいたたり、関心を示していたりと感情が刺激されたことも明らかとなった。

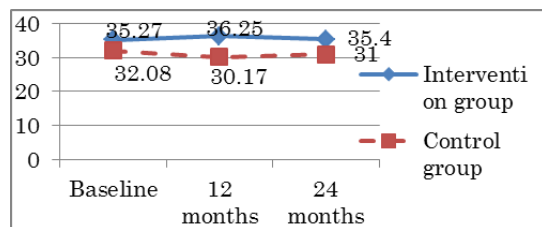


図 1 介入前と介入 2 年後の介入群・対照群：QOL-AD(本人) $**>.01$

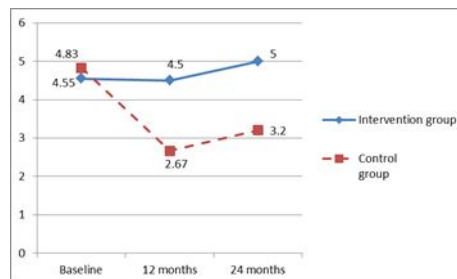


図 2 Philadelphia Geriatric Center Affect Rating Scale:Pleasure 楽しみ(平均得点) $**>.01$

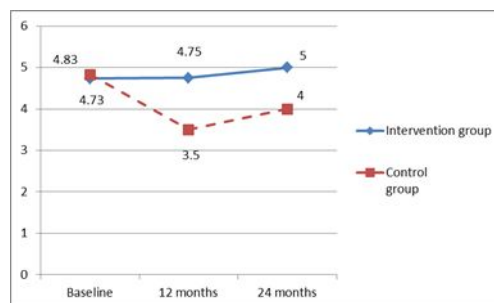


図 3 Philadelphia Geriatric Center Affect Rating Scale:Interest 関心(平均得点) $**>.01$

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

R.Rokkaku, S.Kobayashi, Y.Seki, A.Homma : Can continuous, inter-generational cooperation positively impact the quality of elderly Alzheimer's Sufferers? :An interim report, Journal of Aiging Reserch & Clinical Practice 3(3),174-177,2014. 査読有

[学会発表](計 5 件)

六角 僚子 : 子どもとの継続的世代間交流はアルツハイマー病者の生活の質を維持改善するか,日本老年看護学会第 20 回学術集会,神奈川県横浜市, 6.13 2015.

R.Rokkaku: Can continuous, inter-generational cooperation positively impact the quality of elderly Alzheimer's Sufferers? :An interim report(12mos), The 8th Asian Society Against Dementia Internatilnal Congress,Sri Lanka Colombo, 11.15 2014.

R.Rokkaku: Can continuous, inter-generational cooperation positively impact the quality of elderly Alzheimer's Sufferers? :An interim report,The 20th IAGG World Congress of Gerontolgy and Geriatrics(招待講演),Krea seoul,6.25 2014.

渡辺和美,六角僚子 : 子どもとの継続的世代間交流はアルツハイマー病者の生活の質を維持改善するか- 6 か月後報告 子どもとのアルツハイマー病者の言動の変化に焦点を当てて-,日本認知症ケア学会関東大会,埼玉県さいたま市, 9.1 2014.

R.Rokkaku : Can continuous, inter-generational cooperation positively impact the quality of elderly Alzheimer's Sufferers? :An interim report,The 7th Asian Society Against Dementia Internatilnal Congress, Philippines Cebu, 10.11, 2013.

6. 研究組織

(1)研究代表者: 六角 僚子(ROKKAKU, Ryoko)
東京工科大学・医療保健学部・教授
研究者番号: 10382813

(2)研究分担者: 小林 小百合 (KOBAYASHI, Sayuri)
東京工科大学・医療保健学部・講師
研究者番号: 20238182

研究分担者: 関 由香里 (SEKI, Yukari)
東京工科大学・医療保健学部・助手

研究者番号: 20613285

研究分担者: 本間 昭 (HONMA, Akira)
社会福祉法人浴風会認知症介護研究・研修センター・医科学研究所・センター長
研究者番号: 40081707